

## 乳幼児における母性的養育環境の相違と 発達に関する縦断的研究(4)

—Social Competence (愛着行動・人見知り行動)の発達と  
養育態度および形態—

研究第5部 萩原英敏

### I. 問題

コンピテンスのとらえ方として、大きく3つに分けられる。第1には、環境に適応し、さらに統制する、操作的知的能力と考える立場である。第2には、生物学的機能を果たす前適応、又将来に向かって発達する能力である。そして第3が、Goldberg(1977)や Ainsworth & Bell (1974)等が、ソーシャル・コンピテンスと名づけたもので、それは、乳児の行動が、養育者の行動をかえ、さらに、それが乳児に影響を与えるといった、相互作用の出来る能力をコンピテンスと考える立場である。

ここでは、この第3のソーシャル・コンピテンスの乳児側の Subset としての、愛着行動と、人見知り行動の発達をとらえる事にする。なぜ、愛着行動と人見知り行動を、ソーシャル・コンピテンスの Subset と考えるかという点、Bowlby (1969) による愛着行動とは、「無力な乳児が、そば近くに養育者をとどめることによって、食物をもらい、養育者から学ぶ機会を得るために起こす、吸乳、しがみつき、後追い、泣き、微笑などの行動」と、とらえられている。この事から、愛着行動は、ソーシャル・コンピテンスのいう、養育者の乳児に対する行動をかえるはたらきが出来ると考えることができる。

又、人見知り行動は、この愛着行動の前段階に現われる。養育者と、見知らぬ人とを区別する働きであり、Freedman (1961) や Ainsworth (1967) が、「愛着行動と人見知り行動の発達は、非常に関連しており、一方が遅くなれば、片方も遅くなる」と言っているように、同質のもの、と考えられるからである。

次に、このソーシャル・コンピテンスの発達に関連する養育態度及び形態を明らかにする。ソーシャル・コンピテンスを、乳児と養育者の相互作用と考えている以

上、養育者の乳児に対する態度や養育形態が、このコンピテンス発達に、大いに関与している事は予想される。Ainsworth (1967) は、愛着の形成において、養育者が乳児の発する信号に注意し、乳児のリズムにうまく合わせることでできる—accessibility—の態度が、重要な意味を持っていると言っている。ここでは、この信号のうち、睡眠中の「泣き」をとりあげる。泣きの行動自体は、物理的環境、気質の個人差などにより、その発生頻度や強さはちがうと考えられるが、一方 Ainsworth & Bell (1972) が、「生後1年間の各四半期の泣きに対する養育者の無視は、その次の四半期の乳児の泣き叫びと、有意に相関しているという結果から、養育者のaccessibilityのない態度が、泣き行動を持続させる」と言っている様に、泣き行動に養育態度が非常に関わっている事が予想されるからである。

又、最近、小児保健学の立場から、「母乳—人工乳」といった、哺乳形態が、ソーシャル・コンピテンス、すなわち母子関係を中心とした心理面に大いに関係すると言っている。しかし心理学の立場からでは、Kagan (1969) が、「母親の子供に対する態度と、授乳時に生じる社会的相互作用の性質の方が、母乳で育てられるか、人工乳で育てられるかよりも、臨界的な要因である」として、哺乳形態とソーシャル・コンピテンスが一元的関係でない事を主張しているし、又、横浜 (1978) は、Ainsworth による15の愛着行動を「母乳—人工乳」といった哺乳形態との関連でみた所、なんら有意な差は見出せなかったとしている。そこで、哺乳形態が、その後のソーシャル・コンピテンスに、どの様にかかわっているかをみる。

### II. 方法

1. 被験者 東京都の病院に付設されている、保健指導

部に継続して来所する、新生児から10ヵ月までの、乳児とその母親192組

2. 実験及び面接法 当保健指導部では、乳児期には、毎月か隔月に1回の割合で、健診を行なうシステムになっている。そこでは4名の保健婦が母親に、あらかじめ用意された質問項目について、面接を行なう。又、8~10ヵ月児に対しては、特別に心理専門家が、ソーシャル・コンピテンスや精神発達に関して、別の一室で、実験観察したり、母親に面接する。この一室は、13平方メートル程の広さで、発達検査や面接をするための机やイス、サークル、検査用具などが備えられていて、被験者にとって、この一室は初めての場所であり、又、心理専門家もはじめて会った人である。

(1) 本研究に採用した、保健婦が面接する質問項目

- a 全般にわたって
  - ・出生順位
  - ・母親の勤務の有無（パートも含む）
- b 月齢別に

表1

月 齢	質 問 項 目
1ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の哺乳形態は 母乳 混合乳 人工乳</li> <li>・睡眠状態は 良眠 問題有り</li> </ul>
2~3ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の哺乳形態は 母乳 混合乳 人工乳</li> <li>・睡眠状態は 良眠 問題有り</li> </ul>
4~5ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の哺乳状態は 母乳 混合 人工乳</li> <li>・睡眠状態は 良眠 問題有り</li> <li>・人見知りは 有り 無し</li> </ul>
6~7ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・睡眠状態は 良眠 問題有り</li> <li>・人見知りは 有り 無し</li> </ul>
8~10ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・睡眠状態は 良眠 問題有り</li> </ul>

(2) 母親への愛着行動に関して、心理専門家が行った、実験及び面接項目 [Ainsworth & Bell(1970) の settingを参考にしながら、健診システムに支障のない方法で]

a 実験

- ① 母親といっしょの状態、見知らぬ場所で、見知らぬ人 [心理専門家] にあったら、どうなるか。
- ② 母親といっしょにいる状況において、見知らぬ場所で、乳児は安心して、検査用具などに対して、探索行動をおこなうか。
- ③ 一般的に、見知らぬ場所への適応はどうか。

b 面接項目

- ① 母親が急に、手元にいなくなった時の、乳児の行動はどうか。
- ② 母親がまた、乳児の所にもどって来た時の、乳児の行動はどうか。

III. 評定方法

1. 哺乳形態に関して

月齢1ヵ月から、4~5ヵ月まで3回全部面接し記入されているものを資料とした。ただし、全部同一形態で続けるというケースは少ないので、次の様な基準で形態分離を行なった。

母乳群：3回の内、全回母乳か、1回混合乳が入っている。

混合乳群：3回の内、全回混合乳か、1回母乳が入っている。

人工乳群：3回の内、全回人工乳か、1回混合乳が入っている。

2. 睡眠状態に関して

表2

月 齢	問題有り行動	不 明
1ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ねない</li> <li>・ぐずる</li> <li>・よ</li> <li>く泣く</li> <li>・眠りが浅い</li> <li>・不規則</li> <li>・夕方ぐずる</li> <li>・ねつき悪い</li> <li>・床では泣く</li> </ul>	・夜はだっこ
2~3ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜あまりねない</li> <li>・ぐずる</li> <li>・眠りが浅い</li> <li>・抱いていないと泣く</li> </ul>	・日中不機嫌
4~5ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜泣き</li> <li>・ぐずる</li> <li>・抱いていないとねない</li> <li>・ねむいのになむれない</li> <li>・途中で起きる</li> <li>・夜中ちょこちょこ起きる</li> <li>・床に置くとき起きる</li> <li>・敏感で午睡出来ない</li> </ul>	・昼寝はあまりしない

萩原：乳幼児における母性的養育環境の相違と発達に関する縦断的研究

6~7 ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜中泣く</li> <li>・夜中ぐずる</li> <li>・ねつき悪い</li> <li>・突然泣く</li> <li>・夜中ちよこちよこ起きる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日中不機嫌</li> </ul>
8~10 ヵ月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夜泣き</li> <li>・夜中ぐずる</li> <li>・ねつき悪い</li> <li>・夜中突然泣く</li> <li>・夜中起きる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カンシヤクを起こす</li> </ul>

睡眠状態に関して、5期全部に面接され、記入されているのは、以下の通りで、45パーセント程度である。しかし、4期以下の資料でも、良眠と、問題有りの分布比は、54対51で、全期記入のものと差はなく、有効に使えることがわかった。

- 全期記入 87名 (45%)
- 4期記入 45名 (23%)  
(良眠19 問題26)
- 3期記入 21名 (11%)  
(良眠13 問題8)
- 2期記入 24名 (13%)  
(良眠13 問題11)
- 1期記入 15名 (8%)  
(良眠9 問題6)

3. 母親への愛着行動に関して  
表3

		愛着行動有り	愛着行動無し
実 験	I	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人見知りする</li> <li>・顔をじっと見る</li> <li>・泣く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人見知りしない</li> </ul>
	II	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安心してよく遊ぶ</li> <li>・探索行動をよくする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・じっとしている</li> <li>・探索行動を行なわない</li> </ul>
	III	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適応する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不安を示す</li> <li>・終始慣れない</li> </ul>
面 接	I	<ul style="list-style-type: none"> <li>・後追いをする</li> <li>・泣く</li> <li>・探す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平気である</li> <li>・どうしてよいか苦悩に打ちのめされる</li> </ul>
	II	<ul style="list-style-type: none"> <li>・笑顔をみせる</li> <li>・喜んで声を出す</li> <li>・歓迎の動作をする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・以前とかわらない</li> <li>・歓迎の動作を示さない</li> </ul>

母親への愛着行動の、実験3項目、面接2項目について、1人の心理専門家が、上記の基準から、愛着行動(有り無し)を判定し、記入された項目中、何項目に愛着行動が見られるかを、百分率で求めた。ただし、実験Iの人見知り行動に関しては、すでに消失している事

が考えられるので、以前みられたという記入があれば、たとえこの実験でみられなくとも、人見知り行動有りと判定した。なお判断がつかない場合は、有りの得点の半分とした。又、記入もれがあるので、5項目中3項目以上記入されているものを資料として使った。資料として使ったものの、記入状況は以下の通りである。

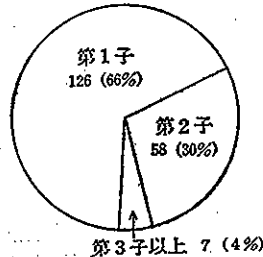
- 全項目記入 124名 (70%)
- 4項目記入 36名 (20%)
- 3項目記入 18名 (10%)
- 計 178名

IV 結果

1 出生順位 (数字は人数 以下同じ)

図1の通り第1子が、3分の2をしめ、第2子が大体3分の1をしめて、第3子以上は、非常に少ない。すなわち今日の日本の平均的な、兄弟数の少ない対象児である。

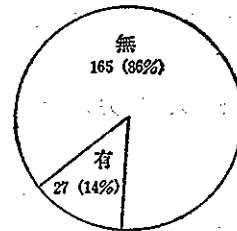
図1 出生順分布



2 母親の勤務の有無

図2の通りほとんどの人が、勤務しておらず、母子分離の経験の少ない対象児であるといえる。

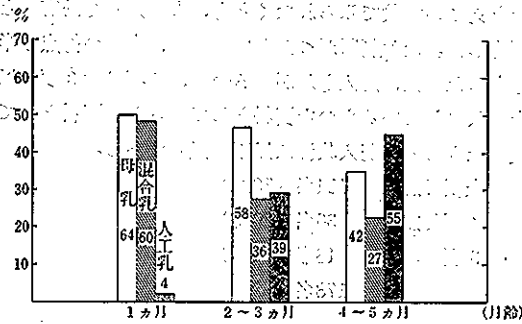
図2 母親の勤務の有無の分布



3 哺乳形態

図3の通り、1ヵ月時では、医学上初乳の重要性が叫ばれている事もあり、母乳混合双方とも、50パーセント近くを示しているが、次第に混合乳が、人工乳にかわっていき、4~5ヵ月児では、人工乳が44パーセントを示し、母乳にかわって、第1位の座を占めるようになる。

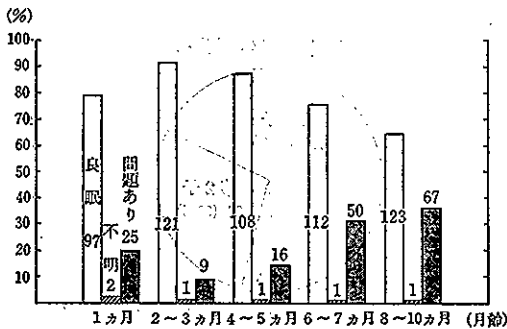
図3 哺乳形態分布



4 睡眠状態

図4の通り、問題有り行動が、2~3ヵ月児まで減少するが、それ以後は上昇カーブをえがき、8~10ヵ月時では、約1/3が何らかの問題有り行動を示している。

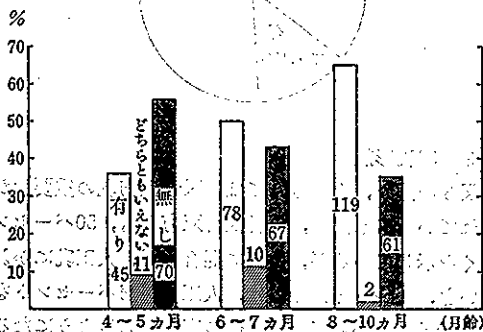
図4 睡眠状態問題有り・無し分布



5 人見知りの有無 (通過率より)

図5の通り、すでに4~5ヵ月時に全体の1/3の乳児が、人見知り行動を示し、6~7ヵ月時には、人見知り行動を示す乳児が、示さない乳児より多くなり、8~10ヵ月時になると、全体の1/2の乳児が、人見知り行動を示している。

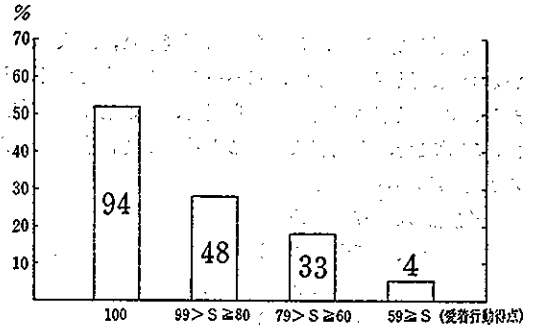
図5 人見知り通過率



6 愛着行動

図6の通り、5つの愛着行動項目中、3つから5つの調査された項目すべてに、愛着行動のみられる乳児が、全体の約半数を占め、1項目みられないのが、約1/4、2項目以上みられないのが、残りの約1/4をしめた。

図6 愛着行動得点分布

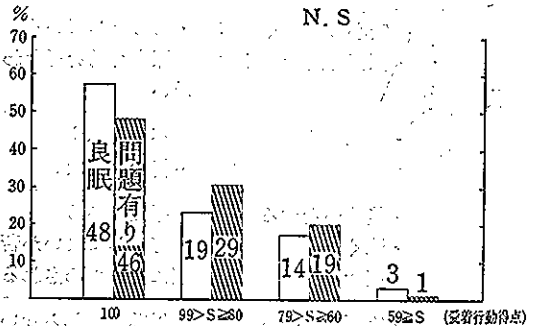


以上、図1~6までが、今回の調査から出た基礎データである。そこで、これを基に、ソーシャル・コンピテンス〔愛着行動・人見知り行動〕の発達と、養育態度及び形態の関連をみていく事にする。

7 愛着行動と睡眠状態

愛着行動と養育態度の指標である、睡眠状態の関連をみたところ、図7の通り睡眠状態問題有り群の愛着行動点が、良眠状態群の得点より、低く分布している事がわかった。しかし、検定の結果、有意な差は見出していない。

図7 愛着行動と睡眠状態



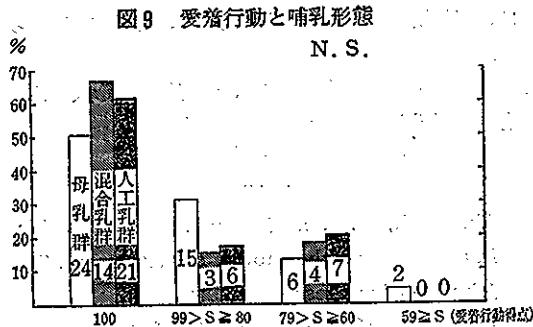
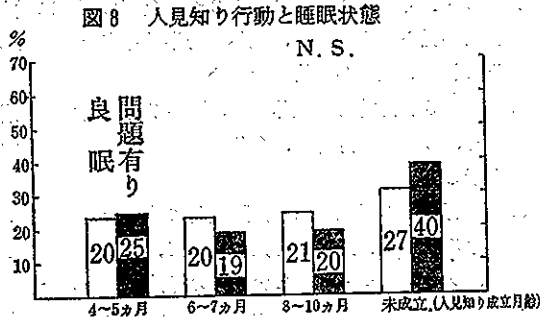
8 人見知り行動と睡眠状態

人見知り行動と睡眠状態の関連をみたところ、図8の通り、睡眠状態問題有りの群の方が、良眠状態群より、いくぶん人見知り成立時期が遅い事がわかった。しかし、これも有意な差は見出していない。

9 愛着行動と哺育形態

愛着行動と養育形態の一側面である、哺乳形態の関連

をみたところ、図9の通り、一定の傾向を示さず、何ら有意な差は見出してない。



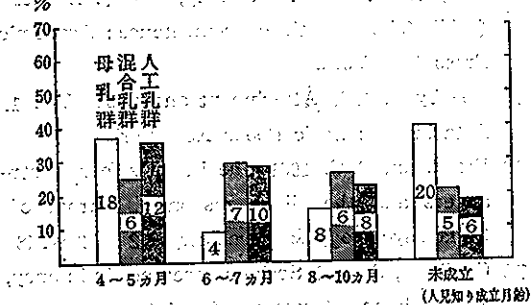
### 10 人見知りと、哺乳形態

人見知りと哺乳形態の関連をみたところ、図10の通り、8~10ヵ月児までの人見知り未成立の乳児の数が、他の群より、母乳群に、有意(2.5%水準)が多かった。これは、母乳を与えられた乳児の方が、ソーシャル・コンピテンスの発達で遅れる事を示すものであである。

### 図10 人見知りと哺乳形態

8~10ヵ月時までの人見知り成立、未成立

P < .025



以上、図7~10までが、ソーシャル・コンピテンスの発達と、養育態度及び形態との関連を示す結果である。最後に、Freedman (1961) や Ainsworth (1967) 等が述べている様に、愛着行動と人見知り行動が、同質のものであるかをみるため、4~5ヵ月時という早期に、

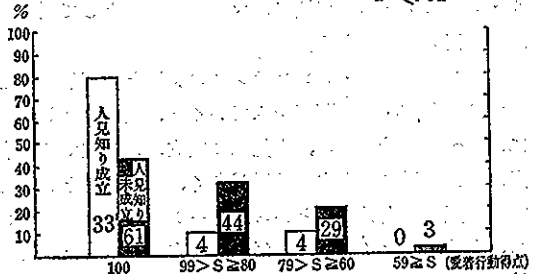
人見知りが成立した群と、しない群のちがいが、愛着行動とどう関連するかを調べてみた。

### 11 愛着行動と、人見知り行動

図11の通りで、4~5ヵ月時に、人見知りが成立した群が、しない群より、愛着行動で高得点をとる者が多かった。検定をしたところ、1%水準の有意差があった。この事から、早期に人見知りを成立させる事と、愛着行動を示す事とは、深い関連のある事だという事が出来る。

図11 愛着行動と人見知り行動成立、未成立

P < .01



## V. 考察

まず睡眠状態であるが、図4の示す様に、2~3ヵ月時を境にして、その後の泣きなど問題有り行動が、増加の一途をたどっている。特に6~7ヵ月時は、その増加が著しいが、これはこの時期、泣きという行動が、母親など養育者を自分の方に引き寄せる手段として使う、いわゆる愛着行動として出現したためだと考えられる。これは、愛着行動と深い関連のある、人見知り行動において、6~7ヵ月時、図5の示すように、約半数の乳児が人見知り行動を示す事と呼応している。

そこで、この人見知り行動であるが、図5の結果をYarrow (1967) の報告と比較してみた。彼は、1人の母性的人物から、他の母性的人物へ移動させる時の、乳児の反応をみたのであるが、その結果、人見知り行動の出現(通過率)は、3ヵ月時で、12%、6ヵ月時で、52%、8ヵ月時で、98%であった。この事は、6ヵ月時では相方とも、50%前後で同じで、8ヵ月時では、Yarrowの結果がかなり高い通過率を示す事となるが、これは、他の人にわたすという、より人見知りを起こしやすい状況に、場面をセッティングしているためだと考えられる。

次に、ソーシャル・コンピテンス〔愛着行動・人見知り行動〕の発達と、養育態度〔睡眠時の泣きといった行動に、どう対処するか〕の関連をみていくと、図7、8が示す様に、有意な差は見出せなかったけれども、睡眠

時に泣きなどの問題がある方が、ソーシャル・コンピテンスの発達に遅れがみられた。睡眠時の乳児の泣くという行動を、Bowlby(1969)の考えている、「生後最も早くから認められる、母親を子どもに近づける機能を持った、Signal Behavior」と定義づけるなら、このSignalを、いつまでも多く出さなければならぬ状態、Ainsworth & Bell (1972)は、この状態は、養育者の無視によって起こると考えているが、この考えに基づいて論を進めると、養育者の子どものSignalを無視するという態度は、愛着行動や人見知り行動といった、ソーシャル・コンピテンスの発達に、マイナス要因として働く事が予想出来るのである。

又、ソーシャル・コンピテンスの発達と養育形態〔ここでは哺乳形態〕の関連をみていくと、図10が示す様に、8~10ヵ月児での、人見知り成立、未成立では、有意に、母乳群に未成立の乳児が多く、母乳授乳といった哺乳形態が、人見知りといったソーシャル・コンピテンスの発達に、マイナスの関係がある事がわかった。この結果は、小児保健学の方から主張される、母乳授乳によって得られる皮膚と皮膚の接触が、母子関係をつくる重要な要素であるといった考えを支持せず、むしろKaganが言っている様な、母乳授乳から生じる、母—子の間隔の近距離のもとでの、eye to eye contact. 話しかけといった社会的相互作用の少なさが、ソーシャル・コンピテンスの発達に、マイナスに働いたのではないかと考えられる。

最後に、愛着行動と人見知り行動の関連をみたところ、図11の示すとおり、有意に、人見知り成立が早い程、愛着行動を起こしやすという結果がでた。これはFreedman や Ainsworth 等の考えを支持するものである。

## VI. 要 約

本研究の目的は、愛着行動・人見知り行動といった、ソーシャル・コンピテンスの発達と、それに関わると思われる、乳児の泣きに対する母親の態度とか、哺乳形態などとの関連を明らかにすることである。

被験者は、東京都の病院に来院する、新生時から10ヵ月時までの乳児とその母親 192組である。

調査方法は、面接と実験観察法である。面接によって、すでに記録された資料から、睡眠時に泣きなどの行動が出るかどうか、人見知り行動はいつ出たのか、今までの哺乳形態はどうなのか、などを調べた、又、8~10ヵ月時に、愛着行動を調べるため、見知らぬ人への反応

などを観察した。

その結果は、以下の通りである。

1. 8~10ヵ月時で、5つから3つの全部の項目に愛着行動が見られる幼児が、全体の約半数を占め、あまりみられない乳児が、約1/4をしめた。
2. 4~5ヵ月時で、全体の1/2、6~7ヵ月時で、全体の1/2、8~10ヵ月時で、全体の2/3の乳児が、人見知りを示した。
3. 養育態度の指標である、睡眠時に泣きなどの行動の起きる乳児が、良眠の乳児に比べて、有意差はないが、ソーシャル・コンピテンスの発達が悪かった。
4. 人見知り行動が、8~10ヵ月時まで起きない乳児は、母親授乳群が、他の群に比べて、有意に多かった。
5. 早期の人見知り行動成立と、愛着行動の形成とは、有意な関係がみられた。

## 文 献

- 1) Ainsworth, M. D. S. 1967 *Infancy in Uganda: Infant care and the growth of attachment*. The John Hopkins Press.
- 2) Ainsworth, M. D. S. & Bell, S. M. 1970 *Attachment Exploration and Separation; Illustrated by the behavior of one-year-olds in a strange situation*. *Child Development*, 41, 49~67
- 3) Ainsworth, M. D. S. & Bell, S. M. 1972 *Infant crying and maternal responsiveness*. *Child Development*, 43, 1171~1190
- 4) Ainsworth, M. D. S. & Bell, S. M. 1974 *Mother-infant interaction and the development of competence*. In K. Connolly, and J. Bruner (Eds) *The growth of competence: Academic Press New York*.
- 5) Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss. Vol. 1. Attachment: Basic Books New York*.
- 6) Freedman, D. G. 1961 *The infant's fear of strangers and the flight response*. *Journal of Child Psychology & Psychiatry*, 2, 242~248
- 7) Goldberg, S. 1977 *Social competence in infancy*, *Merrill-Palmer Quarterly*, 23, 163
- 8) Kagan, J. 1969 *Personality development*. Harcourt Brace Jovanovich Inc. New York
- 9) 大瀧ミドリ 1980 愛着、コンピテンス、母子関係、一理論的概観— 東京家政大学研究紀要, 20, (1), 11~21

- 10) 大瀧ミドリ 1981 乳児期の養育環境とコンピテンスについて 東京家政大学研究紀要, 21 (1), 19~28  
11) 沢田啓司 1980 Breast feeding. 臨床婦人科産科, 34 (4~12)  
12) Yarrow, L.G. 1967 The development of focused relationships during infancy; In exceptional infant (Ed) J. Hellmuth. Seattle, Wash, Special Child Publications  
13) 横浜恵三子 1978 乳幼児期にみる愛着行動とD. Q. およびその他の要因との関連 日本保育学会第31回大会論文集 476~477

ABSTRACT

THE DEVELOPMENT OF SOCIAL COMPETENCE (ATTACHMENT BEHAVIOR AND FEAR OF STRANGER BEHAVIOR) AND UPBRINGING ATTITUDE AS WELL AS NURSING PATTERN

by

Hidetoshi Hagiwara

The purpose of the present study was to examine the relation between the development of social competence, so to speak, attachment or fear of stranger, and the mother's attitude toward her infant crying or the pattern of feeding.

The subjects were 192 pairs of infants and mothers who visited a hospital in Tokyo. The ages of the infants ranged from neonate to ten months.

The investigation was made by methods of interview and experimental observation. Referring to the data already recorded by health nurses, such problems as whether the behavior like crying arose during sleep or not, at what age the fear of stranger behavior appeared and up to then what pattern of feeding had been taken were investigated through interview with the mothers. Then, the responses of the infants to a stranger were observed on five items to study the attachment behavior when they were from 8 months to 10 months of age.

The findings were as follows:

- 1) At the ages from 8 months to 10 months, the attachment behavior was observed on all the five items in about half of the whole infants, and the infants who did not show much attachment on the same items accounted for about a quarter of the whole number.
- 2) The fear of stranger behavior was seen in a third of the whole infants at the ages from 4 months to 5 months, half the whole number, from 6 months to 7 months, and two-thirds of the number, from 8 months to 10 months.
- 3) The infants who cried during sleep, which is thought the indication of the upbringing attitude, revealed bad development of social competence, although not significantly, compared with the infants who had good sleeps.
- 4) Breast-fed infants did not significantly manifest the fear of stranger behavior compared with the infants fed by other patterns of feeding.
- 5) It was noticed that the early formation of the fear of stranger behavior and the formation of attachment behavior maintained significant relations.